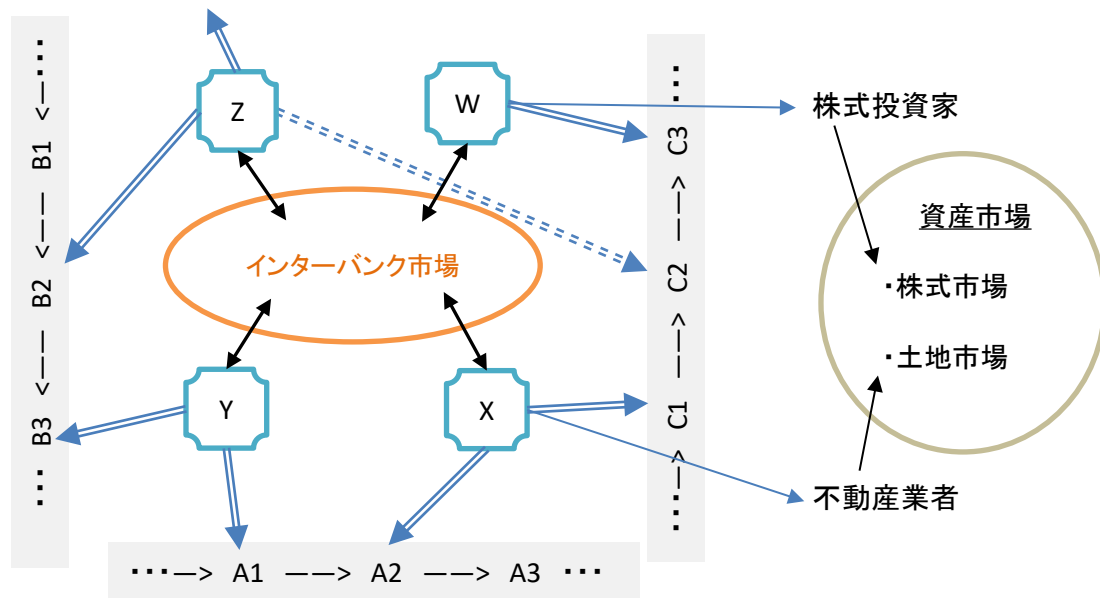


信用(の膨張／収縮)と実体経済(の需要の拡大／縮小)との相乗作用



X, Y, Z … (預金)銀行

An, Bn, Cn … 実体経済で取引の連鎖をもつ企業群。

—> 実体経済(財貨・サービス)の取引連鎖(通貨の流れは逆向き)。

==> 実体経済への融資／貸出し／銀行信用

X→A2、Y→A1、Z→B2、W→C3などの融資(貸出し)により、企業は自己資本をこえる支払い能力を得る。

これにより、各産業の取引が促進され、需要が拡大する。

各銀行への返済に遅延がなければ、各銀行は金融差益をめざして融資を増やす。＝信用膨張
信用膨張はとくに、多額の融資を必要とする設備投資を促進し、二系列の**需要拡大**をすすめる。

銀行の自己資本が充実され、資金繰りが安定し、[現金準備／資産比率]が下がる。

信用膨張は、実体経済の需要拡大(マクロ経済の成長)にともなう借入れ需要の増加の結果であり、かつまた銀行全体による、産業全般への信用膨張の相乗効果の帰結でもある。

インターバンク市場は、銀行が相互に短期的な資金繰りを良好にする機構として順調に機能する。

銀行が潤沢な現金準備を積極的にインターバンク市場で運用。遅滞なく返済＝信用膨張

資産価格が暴落すると、銀行が損失をこうむる(自己資本の減少)。すると、

X銀行は、現金準備を確保するため、C1への融資審査の中止とか、A2への融資削減などを行なう。

A1は売上が減り(需要縮小)、Y銀行への返済が遅滞し、Y銀行に損失を与え、YはB3への融資を減らす。

B3への融資不足は、B2の売上を減少させ、Z銀行への遅滞、Zの損失となり、Zは融資態度を慎重にする。

銀行の既存の融資が連鎖的に不良債権になり、銀行の自己資本が減少、実体経済への信用収縮へ。

資産価格の暴落は、各銀行の自己資本の減少と信用収縮を介して、産業全般の需要縮小をもたらす。

実体経済全体の需要の縮小は、倒産や失業を増やす。

これが銀行の既存の融資を連鎖的に不良債権に変え、自己資本の減少、信用収縮を加重する。

銀行は、自己資本の減少と現金準備の不足を補うため**インターバンク市場**から融資を得ようとする。

しかし銀行の自己資本の減少自体が、インターバンク市場での資金提供の減、銀行間融資を収縮させている。

この中で資金繰りが悪化した銀行(たとえばW)が預金流出や取り付けにあうと(現金準備枯渇)、

銀行はいっせいに、インターバンク市場での貸し出しに慎重になる。

インターバンク市場での信用収縮と資金枯渇は一挙にすすむ。これがシステミック・リスクの出現。

どの銀行も、インターバンク市場からの融資に頼れなくなり、産業全般への信用収縮をさらに強める。

実体経済全体の取引量や売上げがさらに縮小、倒産や失業を増やす。実体経済の悪化＝縮小再生産へ。

これが既存の銀行融資をさらに不良債権に変え、実体経済への信用収縮を強める。

参考)UFJへの金融検査によるダイエーなどの破綻